
Produce !

ninety3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Produce!

【Nコード】

N0707N

【作者名】

ninety3

【あらすじ】

周りとは変わった価値観を持つ少年が、美人だが性格に難がある少女を人気者にしようとする物語。

1 (前書き)

初めての小説です。

女性のほうが男性よりも精神年齢が高い。

中学の頃、一度保健の授業のときに読んだ資料にそんなことが書いてあった。

だが時々、いや頻繁にそれは嘘ではないかと思うことがある。

中学の頃は俺も精神的に馬鹿だった。

そのせいか俺はそんなことは気にもしなかった。

でも高校に入学して五ヶ月で、俺は気付いてしまった。

いつまで経っても、女はキヤーキヤーうるさかった。

あいつがウザいだの、教師が鬱陶しいだの、そんなあまりにも低レベルで幼稚な話を喋り、汚い黄色い笑い声を上げている。

なんなんだこいつらは？

昭和にはこんな奴等はいなかっただろうな。

この頃からだろう、俺は女が嫌いになった。

もちろん、人間としてだ。

「朝から何なんだよ。俺が席に着けないだろうが、糞尼どもが……」

朝から俺はイライラしている。

今日は九月一日、夏休み明けの始業式。

俺はいつもよりも遅く登校してしまった。

理由は簡単、夏休みボケだ。

そして教室に入って俺の席のほうを見てみると、糞尼どもが勝手に占領していたわけだ。

「おいおい、朝からイライラすんなよ」お前怒ると怖いんだからさ」

教卓付近で俺がイラついていると、我が隣のクラスの友人、瀬尾^{せお}が話しかけてきた。

「スマンスマン、朝からこれだったら一日持たないな」

「そうそう」

「で、瀬尾は何をしに来た？俺に合いに来たわけじゃないだろう」

「愚問だね。俺がここに来る理由は一つしかないだろうが匠^{たくみ}」

瀬尾は掛けていた眼鏡（伊達）を人差し指で持ち上げた。

ちなみに、瀬尾が言った匠というのは俺の下の名前だ。

苗字は冬林だ。

「お前も飽きないねえ、あんな女見てばっかで。前にも言ったがあれも俺にしたら糞尼だ」

「はっは、わかってないのはお前のほうだよ。あの美貌を見て心打たれるものはいない！」

そう言つと瀬尾はお目当ての女のほうを見つめた。

御陵綾、みさたき あや今時類稀に見る綺麗な長い髪の女だ。

確か親が病院の院長だとか、まあ要はお嬢様なわけだ。

性格はあまり良くないと見える。

何故なら、そいつの周りには友達がいらないからだ。

まあお嬢様つてのが一番なんだろうな。

ま、どうでもいい話だ。

人間外面が一番じゃないからな。

「じゃあ告白すれば良いじゃんか、お前好きなんだろう？」

「いや、好きなんだけどさ……なんか近寄りがたいじゃん」

「なら所詮その程度なんだな、お前のその愛は」

あまりにも瀬尾がチキンだったから、試しに少し煽ってみた。

「なんだと！俺の愛はそんなに薄っぺらくないぞ！」

「じゃあ告白してみろよ。できなかったらお前をチキンと任命するわ。てかそのうち獲られちまうぞ」

「そんなことさせるかよ！……やってやるよ、俺男だから」

よし、煽り成功。

少しは楽しめそうだな。

「それじゃあ結果教えてくれよ」

「おうよー！ビビッて越し抜かすんじゃないぞ！」

そう言うと、瀬尾は意気揚々と自分の教室へ戻っていった。

さてと、そろそろ俺も席に着くか。

始業式全日程が終わり、今は帰りのST中。

俺は退屈で何度も聞いた担任の声を聞き流していた。

気がつけば、STは終わり後は帰るだけ……いや、瀬尾の告白を見届けなければならぬ。

瀬尾を呼びに席を立つたら、瀬尾が教室に入ってきた。

顔がかなり強張っていた。

俺は面白そうだったから、あえて声をかけなかった。

人の恋路ほど面白いものはない。

「みみみみ、御陵さん。ちょっといいかな？」

おおー、ナイスどもり。

「…えつとなにかよう?」

御陵はぶつきらぼつに言った。

「ここじゃ話し難いから南階段へ来てくれないかな?」

ほほう、よく考えたじゃないか。

南階段はあまり使わないため人がまったくこない。

いわゆる告白スポットなわけだ。

成功率は6割らしい。

…誰が計算したんだか。

御陵はゆっくり頷くと瀬尾と一緒に教室を出た。

俺は着いて行かず、階段の様子が見える場所へ移動した。

さてさてどうなってるんだ。

おお！瀬尾がなんか話してる。

身振り手振りを加えながら必死にやってるな。

んでその告白らしきものに御陵は…

頭を下げた。

瀬尾は何か叫んでる。

ちょっと近くまで行ってみよう。

「どうしてかな？理由を聞きたいんだけど」

瀬尾が言った。

「私恋人よりも今は……友達が欲しいの」

「俺は恋人がいいの！ああもついいよ……やっぱり無理だった」

瀬尾は御陵に背を向けながら去っていった。

可哀相に。

「ちょっと、さっきのは無いんじゃないのか。あれは勇気を出して
いったあいつが報われないじゃないか」

俺は彼女に話しかけた。

「見てたのですか。貴方のほうこそ良くないんじゃないんですか？
人の告白現場を覗くなんて」

毅然とした態度で答えてきた。

それが少し頭にきた。

「偶然通りかかったただけだ。別に悪いとは思っていない。なあお前どうすんだよ？またお前の株が下がっていくぞ。今度は恋愛もしない、男を振りまくってる悪女ってレッテル貼られるぞ。」

「別にどうでもいいわ、そんなの」

「……お前なあゝそんなのだから友達いな

「そんなのわかってるわよ！あなたに言われなくても！」

ぶっきらぼうだった彼女がいきなり怒鳴りだした。

よく聞くと涙声だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0707n/>

Produce !

2010年10月13日06時10分発行